



▲湖岸道路から見る磯野山城



▲立派な門を構える磯野家



▲保積隆夫さん

戦国前期の形を残した山城

磯野山城 (長浜市高月町磯野)

磯野を本貫とする土豪、磯野氏の本拠地にあった磯野山城。曲輪に土塁はないものの、幾重にも設けられた堀切が、戦国前期のこの城の特徴を物語る。

浅井氏の重臣から信長の臣下へ

山本山から賤ヶ岳へ連なる丘陵の中ほどに、南東へ延びる尾根がある。湖岸道路から見ると、尾根の中腹に「磯野山城址」と記された看板がある。城跡はこの山の頂にある。戦国時代、ここを本拠にした磯野氏の居城跡

だ。余呉川を挟んで東は磯野の集落で、村に磯野氏の居館があった。

賤ヶ岳や山本山に登る道がしっかりしており、登る機会も時々あるが、磯野山のルートは地元の歴史通にしか分からない。きわめてマニアックな山歩きになる。

そこで案内をお願いしたのは、「磯野の歴

南の切通道から尾根を北へ登る

姉川の戦いでは織田・徳川軍相手に獅子奮迅の活躍。浅井・朝倉軍が不利と見るや、敵中を突破して守っていた佐和山城に籠城する。ところが兵糧が尽きて小谷へ帰陣しようとする、長政が員昌の母を磔刑に。そのため信長に佐和山城を明け渡すことになる。

その後、信長から高島の支配権を与えられて能力を発揮。信長に認められ織田信澄を養子に迎えるが、なぜか信長の怒りを買って逐電。晩年は磯野に蟄居した。

風と雲の記憶

戦国絵巻を語り継ぐ人びと

500年ほど前の日本。吹き行く風をつかみ、ちぎれ雲を跳び渡って、空へ駆け上ろうとしたあまたの兵たち。近江は合戦の舞台となり、幾多の城が築かれた。いま、一握りの兵が名を残し、わずかな遺構が戦乱の記憶を伝える。風と雲が通りゆく城郭跡で、かの日にときを留め、戦国の物語を後世に語り継ぐ人たちを紹介しよう。

史文化を守る会」のメンバー穂積隆夫さんと上松俊彦さんのお二人。地元の先人、磯野氏と磯野山城の歴史に詳しく、これまで中井均さん(滋賀県立大学教授)や太田浩司さん(長浜市学芸専門監)の協力を得て、会で城跡の調査をおこなったり、地元で講演会を開いたりしてこられた。

磯野員昌（のりのみまさ）という人物をご存じだろうか。磯野に生まれた戦国武将で、浅井長政の重臣として活躍したが、小谷落城の前に織田信長に付く。信長から高島一郡を与えられ活躍するが、最後は謎の出走。そんなことからイメージはあまり芳しくなかった。しかし歴史を丹念に調べてみると、実はタダシイ実力派の武将だったことが分かってきた。

磯野員昌の子孫が、いまも磯野の村に住んでおられる。湖岸道路から村の中央の道を東へ折れた所に、大きな三角屋根の古民家が建っている。入り口に重厚な門があり、「磯野員宏」という表札が掛かっている。代々の当主の名前には「員」が付く。

現在は屋敷の西に余呉川が流れているが、往時は川が村の東を流れていた。したがって村のメインストリートから西へ、城に上る大手道があったようだが、今は荒れて登れない。100mほど南にある「しんかわ橋」を渡って対岸へ。山沿いを南へ進むと、松尾や西野といった村へ通じる切通道が現れる。右手に「登り口」の案内板があり、ここから北へ尾根伝いに登っていくことになる。

急登と堀切の繰り返しを経て主郭へ

磯野山城は、磯野氏が京極氏の重臣だった

山城の常識を覆す数々の石垣

96

鎌刃城（米原市番場）

米原市番場の山稜に築かれた中世の山城「鎌刃城」。この城跡は平成10年から5年がかりで行われた発掘調査によって高石垣による築城の遺構が見つかり、全国的に注目されるようになった。同17年には国の史跡に指定され、今年で第6回を迎える「のろし駅伝」により、他の山城保存団体との交流も活発に行われている。

この城跡をめぐる活動の特色は、地元地域と行政との協働による城跡を活かしたまちづくりが進められていることである。地元番場で鎌刃城の保存継承を進める中心的な役割を果たしてきたのが、「番場の歴史を知り明日を考える会」（以下「考える会」と略）で、今年5月27日には米原市教育委員会と「考える会」との主催により第1回「鎌刃城まつり」も開催された。

数多くの石垣で築かれた鎌刃城とはどのような城だったのか。また、無名だった鎌刃城に光が当たるようになるまでに、どのような活動が行われてきたのだろうか。

出土したいくつもの石垣

鎌刃城は、戦国時代、近江の国を南北に分する国境の城として、江南の佐々木六角氏



▲初めて公開された西の曲輪での小和田先生の説明

激しい道なき道を苦にせず、石垣の出土する可能性の高い曲輪、堀切、畝状堅堀群などを踏査した。西曲輪の発掘が待たれるところだ。

鎌刃城を世に知らせた「考える会」

このように、貴重な中世城郭であることが次々明らかになってくる鎌刃城跡。この城を世に出す原動力となったのが考える会の活動である。

「考える会」は平成4年5月4日、会長を務める泉峰一さん、事務局長を務める酒井進さんらによって始められた。二人は区のPTA役員となったとき、子どもの数の少なさからムラの行く末に危機感を募らせ、地域の活性化に向けたまちづくりのための団体として、考える会を発足させる。会の活動は、まずは歴史を知るところから始めようということに

と江北の京極氏、浅井氏との間でたびたび戦いの場となっている。

城跡は、青龍の滝から尾根伝いに北側に伸びる稜線にある。稜線の両斜面とも人が一人通るのがやつとの幅に削り取られ、まるで鎌の刃の上を歩いているような道だ。しかも途中に、何ヶ所もその道を切断する堀切が設けられている。主郭のある城の中心部・南曲輪で、山の根根は右側の北曲輪と、左側の西曲輪に分かれる。

これまで、主郭部周辺一帯や北側先端の曲輪で発掘調査が行われた。調査初年の平成10年から2年がかりで北曲輪を発掘したところ、石垣によって築かれた城門、半地下式建



▶記念塔に名前を記す「番場の歴史を知り明日を考える会」の泉会長



▲発掘調査で姿を現した主郭の門跡（現在は埋め戻されている）

なった。

泉会長は先祖から引き継いだ山林に、「昔は山城があったんや」と父親から聞いていた。そこでこの中世の山城「鎌刃城」を、考える会の活動の柱として提案し、学習会や現地調査を繰り返し行った。地元の人たちとともにハイキングを行ったり、鎌刃城の歴史や戦国時代における役割などを学んだりした。鎌刃城の山林所有者は西番場区と東番場区の両自治会にまたがっていたが、まちづくりに情熱を持つ東番場の有志にも考える会への入会を呼びかけ、会員は現在、両区民に広がっている。

考える会では、城の歴史を学んだ成果を手作りの資料集にまとめる一方、城跡や山道の草刈、道標整備を行ったり、ハイキングコースとして区民参加でアジサイを植えるなど、環境整備も行っている。また、発掘調査に従

物の礎石、大量の鉄釘などが見つかり、地下室を持つ、床板張りの立派な建物が建っていたことがわかった。

同12年からは主郭部の発掘が行われたが、主郭は周囲4面とも高石垣が築かれ、南面には空堀が掘られていた。また、南内側の土塁と思われていた箇所も石築地であり、主郭の南側の副郭との間の堀切部も石垣になっていたことがわかった。主郭北側には虎口が設けられ、4本柱の薬医門の礎石も出土した。北面全体が石の階段や高石垣によって覆われており、この城が「土づくりの城」という中世城郭のイメージを覆すものだということがわかる。

第1回「鎌刃城まつり」では、未発掘の西曲輪を歩く初めての機会が持たれた。戦国史研究で知られる静岡大学教授・小和田哲男さんや、地元の中世城郭専門家・中井均さんから解説を受け、参加した100人は高低差が



▲主郭で説明を聞く第1回鎌刃城まつり参加者たち



▲主郭の城門跡から湖北平野を見る

事したほか、夏休みには子ども発掘体験を企画し、地域の人々が身をもって歴史の「掘り起こし」を体験した。

城の用水を確保するため、青龍の滝から引かれていた「水の手」遺構を調査測量することで、北曲輪までの高低差を確認し、その成果を活かして平成13年には湖国21世紀記念事業として広く参加者を募り、竹やパイプを約500mにわたってつなぎ、滝からの通水実験にも成功した。

中でも、平成14年から考える会によって始められた「のろし駅伝」は、毎年11月23日に山城跡をのろしのリレーでつないでいくもので、他地域との交流や活動の活性化にもつながっており、第8回ふるさとイベント大賞（文化・交流部門賞）を受賞するなど、高い評価を得ている。（本誌25ページで紹介）

5月に開催された「鎌刃城まつり」は、「米原市の春の山城イベント」として、秋の上平寺でのイベントとともに育てていきたい」と教育委員会ではすこく力が入っている様子だ。「今年西曲輪を歩いてもらいましたし、「鎌刃城友の会」も発足させることになりました。北曲輪の発掘で見つけた石垣は、今、埋め戻されていますが、皆さんに見てもらえるように早く整備してほしいですね。皆さんも友の会に入ってください。いっしょに鎌刃城とふれあいましょう」と泉会長。今後も、鎌刃城をめぐる動向から目が離せないようだ。

（番匠 満）